

令和元年6月22日現在

機関番号：14401

研究種目：若手研究(B)

研究期間：2014～2018

課題番号：26770118

研究課題名(和文)1945年以降のドイツ語文学における<想起される言語>

研究課題名(英文)Remembrance of a Language in German-Language Literature after 1945

研究代表者

宮崎 麻子(Miyazaki, Asako)

大阪大学・言語文化研究科(言語文化専攻)・准教授

研究者番号：60724763

交付決定額(研究期間全体):(直接経費) 2,200,000円

研究成果の概要(和文):ドイツ語文学における「記憶」というテーマに関して、資料を収集し、複数の論点を提示していく成果を発表することができた。「言語の記憶」という論点から出発し、その成果となるドイツ語論文が「Zeitschrift fuer interkulturelle Germanistik 文化を超えるドイツ文学」誌に掲載された。そして論点を拡大し、歴史的出来事の記憶や過ぎ去った時代・消滅した国家の記憶について文学の言説を比較しながら分析した。その成果は三つの国際学会と一つの国内学会での口頭発表、および三篇の日本語論文と一篇のドイツ語論文(論集のうちの一章)で発表した。

研究成果の学術的意義や社会的意義

本研究課題の成果は、内容的にはドイツ現代文学の分野と、学際的な記憶をめぐる文化研究(Cultural Memory Studies)の交差する領域の業績といえる。ドイツ現代文学の観点から、記憶の文化をめぐる複数の論点を指摘したり深化させたりした。

また、学際的な国際学会に参加し(フィンランド、ポルトガル、韓国)、口頭発表や議論を行ったことで、内容的に視野を広げただけでなく研究交流のネットワークも広げることができた。

研究成果の概要(英文):This research project enabled me to attain access to enough materials, not only in Japan, but also in the libraries in Germany. Thematically, I started with the topic "remembrance of a language" and published an article about this in German, in the Journal "Zeitschrift fuer interkulturelle Germanistik". I could then develop and analyze several topics of literary discourses about memory such as narratives about cultural memory of historical events, of a past decade or a collapsed state (the ex-GDR) as well as literary narratives which conflicts with social discourses about collective memories. I discussed the results of these research endeavors at four conferences and in four publications, specifically: one oral presentation in English (Turku, 2015), two in German (Lisbon, 2016; Seoul, 2016) and one in Japanese (Osaka, 2016) and three articles written in Japanese (2014, 2015 and 2017) and one in German (2017).

研究分野：ドイツ文学

キーワード：記憶 想起 ドイツ現代文学 東ドイツ ホロコースト

様式 C - 19、F - 19 - 1、Z - 19、CK - 19 (共通)

1. 研究開始当初の背景

本研究は2014年に開始され、言語の記憶というテーマを中心に発せられた。その背景にあるのは、記憶をめぐる文化研究(Cultural Memory Studies)と総称される学際的な議論において、とくに現代の文化を論じる文脈においては、出来事の記憶が中心的なテーマとなってきたことがある。「文化的記憶」とは、一定の集団が共有する過去についての言説群といえ、その集団のアイデンティティを支えるものとされている。これはフランスの社会学者アルヴァックスの「集合的記憶」論や、ドイツの考古学者ヤン・アスマン、ドイツの英文学者アライダ・アスマンらの理論的考察によって発展し、近年は(1990年代～)学際的な領域を構成してきた議論の中心的な概念である。ある国家の起源をめぐる神話や伝統的な儀礼・慣習なども文化的記憶といわれるが、現代文化の文脈では、現代社会における諸集団のアイデンティティを規定するような出来事をめぐる記憶がたびたび問題になる(戦争、テロ、革命など)。

報告者はドイツ現代文学の領域からこの議論に関与することで、独自の視点を提供しようと試みてきた。博士課程で行った研究では、崩壊国家(東ドイツ)をめぐる想起の語りに取り組み、現にある集団の集団性を支えるものとしての文化的記憶に対するオルタナティブな視点を示してきた。そこで、とりわけ文学テキスト群が露呈するような、不安定な想起、集団的アイデンティティを支えるどころかむしろ解体するような想起の語りを分析し、博士論文として2013年に出版した。

このような現代文学における想起の語りの機能についての考察をふまえつつ、さらなる新しい視点を2012年末から模索していた。記憶論というフィールドにおいて、博士論文(2012年11月提出)にまとめた研究とはまた異なる角度で新しい貢献を行っていきけるはずだ、ということについて、ベルリン・フンボルト大学での当時の指導教員ウルリケ・フェダー教授にも示唆をいただいた。新しいテーマとして、たとえば当初は移民文学における出身国の記憶といった構想も検討したのであるが、私がそれまでに東ドイツの記憶について考察してきたことをふまえれば、扱う対象テキスト群を移民文学に変えても、国家の記憶とアイデンティティという枠組みそのものがやや似ており、記憶論としての新しい視点を打ち出して創造的な議論を行うことは難しいのではないかと、といった問題点がフェダー教授との対話から浮かび上がったのである。

そこで、出来事の記憶とも、過去の時代、あるいは国家をめぐる記憶とも、質的に異なるような記憶についての言説群を文学に見出すことができるのではないかと、模索を続けていた。質的に異なるタイプの記憶にはどのようなものがあるか。その考察によって文化的記憶の概念への視点を豊かにし、記憶論を拡充することに寄与できるとしたら、どのようにか。これを考えた結果、ドイツ語現代文学の中に見つけたテーマが、言語の記憶であった。

2. 研究の目的

(1) 研究の大きな目的は、ドイツ語圏の現代文学研究から、記憶をめぐる学際的な文化研究の議論に新しい視点を提供することである。質的に異なる記憶の種類を論じることで、記憶観・記憶概念そのものを問い直しながら、豊かにしていくことを目指した。

(2) より具体的には、上述した研究の背景をふまえ、「言語の記憶」という新しいテーマに取り組み、そこで見えてくる記憶・想起のあり方の特徴を明らかにすることを目指した。その際に、出来事の記憶、過去の時代の記憶、国家の記憶といった複数の種類の記憶と比較を行うこととした。

3. 研究の方法

(1) 「言語の記憶」についての調査・考察

対象の選定：ドイツ語圏から別の言語圏へと亡命・移住した作家たちによるテキスト群、とりわけナチ期やその前後に亡命・移住したユダヤ系作家のテキスト群を調査し、その中で言語について言及があるものを選んだ。迫害対象となってしまったユダヤ系のドイツ語作家には複数言語使用者が多い。複数の言語の中でドイツ語という言語はナチの言語という含意を伴ってしまうという状況が生じた。つまり亡命文学においてドイツ語はトラウマ的な記憶と結びついている。ドイツ語での詩作を放棄する作家、放棄したものの再開した作家などもいる。そのような中、亡命における母語(ドイツ語)の記憶というテーマが彼らの作品の中に現れることにもなったのだ。中でも、言語というテーマとの取り組みが顕著にみられるテキスト群として、パウル・ツェラン、ローゼ・アウスレンダー、ヒルデ・ドミンらの詩を選んだ。

関連する歴史的背景と作家の情報についての調査：パウル・ツェランとローゼ・アウスレンダーはブコヴィナ地方チェルノヴィツ出身である。ブコヴィナは戦前まではユダヤ文化が繁栄した多言語使用地域であった。そこから生まれたドイツ語作家たちも多い。戦後はルーマニアとウクライナに属し、戦前の文化とは断絶がある。その独特の文脈、とりわけドイツ語の使用状況と文学史について、調査した。

言語の記憶に関連がある文化論、考察を深めるための先行研究の調査：ジャック・デリダ『たった一つの、私のものではない言葉 他者の単一言語使用』は、哲学者デリダの個人的経験をふまえ、言語と権力をめぐる問題提起がみられる。またそれはヴァルター・ベンヤミンの翻訳論をふまえている。神秘的な言語観が見られる点に、両者の考察、そしてさらには一部の詩人たちの詩の共通点を感じられるため、その観点を考察した。

(2) 複数の異なる質の記憶を比較しつつ行う考察

本研究以前から行っていた崩壊国家(東ドイツ)の想起をめぐる文学の研究も終わらせず、新たな視点と比較しながら、継続・発展した。また、(1)で取り組むようになったホロコーストとの関連が強い文学作品についても広く調査し、歴史的・文学史的な文脈を確実にふまえるのはもちろんのこと、調査の過程で新たな視点を発見することをも期待した。また、主に扱うのはドイツ語の文学作品群であるが、視覚芸術の分野も視野に入れた。

4. 研究成果

(1) 言語の記憶をめぐる論文：前項3-(1)で示した作業を完遂し、ローゼ・アウスレンダー、ヒルデ・ドミンの詩を中心に論じた論文を発表した。ここで得られた最大の成果は、迫害と結びついたドイツ語をめぐる記憶という問題に詩人たちが取り組む中で、どのようなトラウマとも結びついていないまっさらな言語への希求が生まれており、しかもそのことが記憶と結びつく局面を発見した点だ。そのようなまっさらな言語への希求があること自体については、複数の先行研究でも論じられていた。しかし、どんな経験とも結びついていない言語が想像上の過去に存在したことを思い出すという、矛盾を抱えた行為あるいはそうした想像力が詩の中で展開していることを指摘し、それを神秘的な言語観という観点で論じた点に本論文の重要な収穫があったと考える。論文はドイツ語で、英語の要約を付して「Zeitschrift fuer interkulturelle Germanistik(文化を超えたドイツ文学のための雑誌)」に掲載された。この雑誌はドイツの出版社 transcript から出版されており、ルクセンブルク大学の教員が主な編集を担当している国際学術誌であり、英語とドイツ語の論文を掲載し、紙媒体とオンラインの両方の版を出している。Interkulturell(文化を超える)を掲げた雑誌には、亡命文学や移民文学、複数言語の問題といったテーマがたびたび扱われるので、本論文が関連する興味をもつ読者に読まれるためには最適な雑誌と考え、投稿した。

(2) 文学における、ドイツ現代史のさまざまな記憶・想起に関する研究成果：

数量としては、言語の問題を直接扱った考察よりも、東ドイツやホロコーストといった話題をめぐる想起の文学・芸術についての研究成果が多くなった。これは調査の過程での思わぬ発見が続いたこと、学会参加のきっかけが得やすかったことによる。

東ドイツの想起をめぐる文学の研究の発展：ポルトガルのリスボンで行われた、ナショナリズムをテーマとしたドイツ文化研究の学会に参加し(2016年4月)、クリスタ・ヴォルフの小説におけるナショナルな欲望、共同体への希求、そしてそれらを断絶する要素について口頭発表を行った。この学会では、ポルトガルのドイツ文学研究者だけでなく、ドイツ、トルコなどからの参加者とも議論を行うことができた。

ドイツ語圏の2000年-2015年の文学の動向をさまざまな視点で探る論集『現代を書く』に、「ポスト東ドイツ文学」の章を執筆した。これは論集の編者のひとりであるウルリケ・フェダー教授(ベルリン・フンボルト大学)に依頼された原稿であり、博士論文の研究成果をふまえつつ、新しい文学作品にも新たに言及して完成させた。それは、アンゲリカ・クリュッセンドルフの連作小説とクリスタ・ヴォルフの最後の長篇小説などである。論集は2017年1月にフィンク出版社から出版された。フィンク出版社はドイツの人文学において重要な研究書を多く出版してきた出版社のひとつである。本書は充実した構成と議論のアクチュアリティを兼ね備えており、ドイツ文学の分野へのインパクトの高い論集が完成した。

ホロコーストの被害の記憶をめぐる文学・芸術作品の調査：言語の記憶を研究するにあたってナチから逃れたユダヤ系作家の文学を主要な対象として選んだため、ホロコーストの被害をめぐる記憶について調査を行うこととなった。調査の過程で、W.G.ゼーバルトの小説や、ミロスラフ・パウカの美術作品はホロコーストの想起のあり方について独自の美学、そしてそれと関連する記憶の継承の問題すなわちホロコーストを体験していない世代の問題を提起する要素があることに気が付いた。言語の問題に関連がある作品を調査する過程で出会った作品群であるが(パウカのインスタレーションは視覚芸術だが、パウル・ツェランの詩を題名で引用するなど言語、特にドイツ語の問題とも接点がある)、これらの作品と取り組んだ成果においては、言語の問題とは別の論点(被害を直接体験していない世代と記憶との関係)を強調することとなった。

ゼーバルトとパウカ、ツェランを合わせて論じた英語論文を執筆した。これは2013年にベルリンで参加した口頭発表をもとにしているが、その時点ではゼーバルトやパウカには触れておらず、内容を大きく変更・発展させたうえで執筆したことになる。2015年に編者であるベルリン・フンボルト大学スラブ文学科のフランク教授に提出し、2018年に校正作業を行った。出版が遅れており、まだ公刊されていないが、三度のベルリン研究滞在においてフランク教授、そしてフランク教授の研究室の若手研究者と議論や校正作業を共に行うことができたため、執筆を通しての研究交流も意義深かった。

パウカの美術作品とツェランの詩の関係に焦点を当てた日本語論文を執筆し、発表した(2015年)。

ゼーバルトの小説『移民たち』を勤務先の大学院の授業で扱った(2016/17冬学期)。ゼーバルトはドイツ語作家だがイギリスに長く在住し、作品の受容は英米圏で先に普及したという経緯もあり、英語圏の文学・文化を専攻している大学院生からリクエストを受け、ゼーバルトの小説およびそれに関する英語論文を読んで議論した。刺激を受け、小説『移民たち』について日本語論文を執筆・発表した(2017)。

複数の記憶が関連しあうような現代文学の作品の分析：イエニー・エルペンベックの小説『襲来/家探し』には、ドイツ現代史の多くの重要なトピックが詰め込まれている。ナチ政権の登場、ナチ政権への加担、ホロコーストの被害、強制移住、戦時中のソ連兵による婦女暴行、東ドイツ、ベルリンの壁建設、その崩壊などだ。多くの問題がひとつの作品の中で扱われているため、本研究との接点が強く、この作品を分析して2015年のフィンランドにおける学会で口頭発表した。ただ、扱われる問題の種類が多すぎることや、学会のテーマ(Storytelling)との関連から、質的に異なる記憶観の比較という、本研究が当初目指していた方向での考察を深めるには至らなかった。より学会のテーマに即して、さまざまな出来事を非連続的に語る語りの形式を中心に論じた。フィンランドの学会は、トゥルク大学のハンナ・メレトジャ教授(比較文学)による学会コンセプトの解説や討論の進行、プログラムの設定が優れており、さらに、記憶をめぐる文化研究の第一人者であるアライダ・アスマン教授をはじめとしたキーノート講演も充実していた。多くの研究者と対話する時間も確保されており、意義深い学会参加となった。

2016年8月にはソウルでアジアゲルマニスト会議に参加した。ここでは、ゼーバルトの小説『アウステルリッツ』(ホロコーストの記憶と関連している)と、ユードイト・シャランスキーの小説『キリンの首』(東ドイツ崩壊後の歴史観をみてとることができる)の二作品を扱うことで、異なる種類の記憶について比較しながら考察することを試みた。ここで発見した新たな収穫は、どちらの小説にも生物学や動物学に関する話題が度々現れることである。そこで、遺伝学や進化論をはじめとした生物学の言説が、いかに過去の歴史を捉える人々の認識に(時には疑似科学の言説として)影響を与えてきたか、そしてそれが現代ドイツの文脈でどのような問題と関係しているかを考察し、論じた。この口頭発表をもとにした原稿は、学会の記念論集に掲載される予定である。

5. 主な発表論文等

〔雑誌論文〕(計4件)

宮崎麻子「隣り合わせの運命についての物語 - ゼーバルト『移民たち』の場合」,「文化」の解説(17)言語文化共同プロジェクト2016、21-30. 査読無し

Miyazaki, Asako: Erinnerung an eine "erinnerungslose" Sprache. Sprachimagination bei den Exildichterinnen Hilde Domin und Rose Ausländer, Zeitschrift für interkulturelle Germanistik (ZiG), 7. Jahrgang, 2016, Heft 1, 33-46. 査読有り

宮崎麻子「ホロコーストの記憶をめぐる「目」の形象 ミロスラフ・パウカのビデオ・インスタレーション「BlueGasEyes」(2004)とパウル・ツェランの二つの詩」,「文化」の解説(15)言語文化共同研究プロジェクト2014、2015、31-41. 査読無し

宮崎麻子「迷走する戦車 - グリュンバインの「ある古い走行録」における累積的な歴史の想起」,ドイツ文学、12(2)、2014、264-279. 査読有り

〔学会発表〕(計4件)

宮崎麻子: ポスト東ドイツ文学における想起の語り、大阪大学ドイツ文学会、2016年11月19日.

Miyazaki, Asako: Biologische Diskurse in der Erinnerungsliteratur seit 2000. Asiatische Germanistentagung (アジアゲルマニスト会議) (Seoul, Korea) 2016年8月24日.

Miyazaki, Asako: Entdeckung und Vereinnahmung? Umgang mit Exilliteratur in Christa Wolfs Roman "Stadt der Engel oder The Overcoat of Dr. Freud" (2010). Nationalismus. Europe in its Labyrinth (Lisbon, Portugal) 2016年4月22日.

Miyazaki, Asako: Repetition of Things and Variation of Experiences: Jenny Erpenbeck's novel Visitation. Ethics of Storytelling: Historical Imagination in Contemporary Literature, Media and Visual Arts (Turku, Finland) 2015年6月5日.

〔図書〕(計1件)

Corina Caduff und Ulrike Vedder (Hg.): Gegenwart schreiben. Zur deutschsprachigen Literatur 2000-2015, Paderborn: Wilhelm Fink 2017.

(担当:分担執筆: Miyazaki, Asako: Post-DDR-Literatur. Politische Diskurse über die DDR in der Literatur seit 2000. S.27-36)

〔産業財産権〕

出願状況(計0件)

名称:

発明者:

権利者:

種類:

番号:

出願年:

国内外の別:

取得状況（計 0 件）

名称：
発明者：
権利者：
種類：
番号：
取得年：
国内外の別：

〔その他〕
ホームページ等

6. 研究組織

(1) 研究分担者

研究分担者氏名：
ローマ字氏名：
所属研究機関名：
部局名：
職名：
研究者番号（8桁）：

(2) 研究協力者

研究協力者氏名：
ローマ字氏名：

科研費による研究は、研究者の自覚と責任において実施するものです。そのため、研究の実施や研究成果の公表等については、国の要請等に基づくものではなく、その研究成果に関する見解や責任は、研究者個人に帰属されます。